ムサビの教員が選ぶ
美大生におすすめの本
Recommended books for art students.

基礎デザイン学科
小林昭世教授

基礎デザイン学会という学会があり、2015 年に『デザインを考える　名著とともに』という特集を出版しました。以下は、20 世紀のデザインを振り返りながら考えるために、私が紹介を担当した 19 冊の本です。ここではその中から 100 年近く前のデザインの動きと知を知るための 5 冊の本を展示します。

館内閲覧のみ

『デザインを考える　名著とともに』

基礎デザイン学会，2015

p12
『ヴィジョン・イン・モーション』

ラースロー・モホイ＝ナジ 著 , 井口壽乃 訳,
国書刊行会，2019

原著は 1947 年に出版されたものであるが、内容はそれ以前、バウハウスの教育からの蓄積とその改訂に基づいている。本書の特徴と功績は二点ある。一つは、その時代の美術に限らず広く芸術の諸動向が見通されていること、もう一つは、教育の成果が集成され、さらに将来に向けての青写真が示されている点である。この教育も、デザイン分野のみならず、主に教育実験の場となったイリノイ工科大学のデザイン学部 (ID) では、絵画、人文学、建築、映画、写真、科学と技術にわたっている。

そのなかで、現在の諸動向を広く確認しようとする作業は今日ますます価値を増している。リジツキーが示した様々なイズム、写真や映像の実験、ダダイズム、未来派、キネティック彫刻、等を始めとした事例に基づいている。今日ではカタログ的に集成され、扱われることが多いが、現在についての丹念な確認は制作や思考の基盤である。教育への応用では、それらが技術も含めて、技法化、方法化されている。バウハウスの素材教育や技術的・素材的な拡張、デフォルマシン、モンタージュ、マンレイのレイヨグラム、X 線、視点の合成、動きの二次元化である。

モホイ＝ナジは、卓越した教育者であるが、その前に、哲学者であり芸術家でもある。彼の関心の一つは「新しい知覚（new vision）」であるが、これは芸術、技術、科学の統合の上に達成されるものである。
彼にとって、デザインとは態度（姿勢）、つまり、何を、どのように表現すべきかである。

駐車場の雪の上を走るタイヤの軌跡、劣化したペンキのテクスチャ、プラスチックやガラスの層折によるテクスチャ、コーヒーの香りの写真という個々の美しい視覚化の例を際限なく挙げることができるが、最も卓越した特徴は、光－空間モデュレータ、ウェルズのための空間効果、言語モデュレータとしての集団詩など、絶えず知覚を拡張していく装置の提案にある。

p18
『Form』　max.bill

閲覧のみ　貸出不可

本書は、1949 年にマックス・ビルのアイデアと計画に基づいて、スイス工作連盟が主催し、スイス連邦のインテリア部門およびスイスサンプル・フェアが共催した巡回展「die gute form」がもとになっている。この巡回展は最近、Max Bill's View of Things, Die gute Form: An Exhibition 1949, Lars Muller, 2014 として、関係者のエッセイも加えられ、再版された。良い形、グッドデザインとして選ばれているのは、岩や煙の結晶や複雑な形にはじまり、ビル自身のプロダクツ、彫刻、横をはじめ、アアルト、イサム・ノグチ、ジオ・ポンティ、ヴィターリなど、20 世紀の代表的なデザイン、道具、車、飛行機、家具、建築、環境である。

マックス・ビル自身の言葉によれば、「die gute form」は人間活動の最も広い範囲で突出した成果に光を当てた巡回美術展である。その範囲は自然の完全な形成の純粋な観察に始まり、科学的な発見を通して、芸術家の直感から引き出された生産品にいたる、創造的な刺激、それゆえ、自然の法則をあらゆる規模の技術、機械要素から今日の人々が使用する家庭の機器や設備、洗練された工作機器への応用における対照的あるいは類似的な特徴を見ることができる。

展覧会のタイトルでもあり、本書のタイトルである「die gute form」を良い形と捉えるか、グッドデザインと捉えるか、形とデザインの関係についてはこのレビューの範囲を超えるので、Max Bill: FORM, FUNCTION, BEAUTY=GESTALT, 2005 や向井周太郎の「マックス・ビル」（現代デザイン理論のエッセンス）を参照してもらいたい。この展覧会におけるマックス・ビルの簡潔な定義を引用してヒントとしよう。「われわれはグッドデザインを機能的にまた技術的にプロダクツが展開されるための自然な形を意味するものと理解している。それは、視覚に訴える仕方で意図する目的を果たすのである。ここで示した事例はそういう基準にしたがって選択された。」本書は 20 世紀半ばのデザインの典型的な様式の目録ではなく、グッドデザイン運動の理念を視覚的に捉えるための装置である。

p33
『視覚言語 : 絵画・写真・広告デザインへの手引』

G. ケペッシュ 著 ; グラフィック社編集部 訳,
グラフィック社，1973

本書には二つの推薦の言葉がある。建築理論のギーディオンによる「新しい空間概念に対応する視覚概念」と、言語学のハヤカワによる「物を空間において認知するのではなく、構造、秩序、出来事の関連性として認知する視覚習慣の再組織化」である。これらは、端的に本書の目的を言い当てている。そこで語られるように、本書は「視覚化」の可能性を追求している。視覚は、理性と同じ原理で働く訳ではないので、本書の試みは、それを言語化することにある。また視覚化の対象はより複雑な空間や時間において現れる現象である。本書は、一見して、事典に近い体裁を取っている。しかし、事典において語彙は予め与えられているのに対し、概念や枠組みが確定していない視覚化について、多くの言葉のラベルを与え、それをすくいあげたことは著書のこの領域への功績である。例えば、造形面における組織的総合化においては、視覚の場、空間における力の場、多義性、視覚的表現においては、単位、大きさの関係、画面の究極的開放、人工的な光源、動き、力動的な視覚表現を目指している点においては、意味深い視覚記号の組織化の法則、意味の組織的総合化における固定的な体系の崩壊等、意味や価値の創造と再創造に関するものである。

それらの視覚言語に対して、可能な限り原理の説明を与え、その使用を納得させる事例を美術、デザイン、写真、広告、建築などの領域から広く集めている点に本書の第二の特徴がある。

ムサビの教員が選ぶ
美大生におすすめの本
Recommended books for art students.

基礎デザイン学科
小林昭世教授

基礎デザイン学会という学会があり、2015 年に『デザインを考える　名著とともに』という特集を出版しました。以下は、20 世紀のデザインを振り返りながら考えるために、私が紹介を担当した 19 冊の本です。ここではその中から 100 年近く前のデザインの動きと知を知るための 5 冊の本を展示します。

『デザインを考える　名著とともに』

基礎デザイン学会，2015

館内閲覧のみ

p43
『造形思考 上・下』

パウル・クレー（著),
土方定一 ; 菊盛英夫 ; 坂崎乙郎 訳,
新潮社，1973

編者のユルク・シュピラーによれば、クレーは修行時代から造形の根本を意識した画家であった。「造形美術は決して詩的な観念や気分から始まるのでなく、ひとつまたはいくつかの形象を作りあげることや、いくつもの色や色価を調和させることから始まって行く …」しかし、本書に見られる思考に至るまでには、例えば、カンディンスキーの論文「純粋芸術としての絵画」(1918) をはじめとする刺激や、バウハウスにおける自由絵画クラスや理論クラス、つまり「生命あるものを現し、それを動的な組成によって明らかにし、合法則的ものを根源的なルールのうちにしっかり捉えること」などの契機があった。

フォルムの思考において、上に述べた「生命」は決して比喩なものではない。「生きた機能に空間と形態を与えること、そのときはじめて、リンゴやカタツムリ、家でもそうだが、そのまわりに外郭ができる。」この「内と外の関係」は、フォルムの形成を超えて、運動過程、例えば「人間の運動は、歩行から跳躍や滑行に至り、ついには精神の運動の全面的な強度としての内的激動にまでいたる。」このようにいくつもの相が重なりあい、調和する発展段階が、静的な秩序や形成を超え、生命や精神を捉える動的な秩序として思考される。空間や色彩においても動的な秩序が思考される。

本書では、多くの、そして広範囲にわたる思考の断片が、魅力的な図式として表現される。しかし、クレーにとっての創造的な制作は、決して教条的な原理でない。「形態が生命を持つためには、有機的編制の中で新しく秩序づけられるべきものである。」そもそも、「人は常に発展の中にあり、開かれていて、生のなかにおいても高められた子供、創造の子供でなければならない。」というのがその理由である。

p46
『デザイニング・プログラム』

カール・ゲルストナー 著 , ラース・ミュラー 編集 ,
永原康史 監訳 , ヤーン・フォルネル 訳 ,
ビー・エヌ・エヌ新社 ,2020

本書の主要な主題の一つは、いわゆるタイポグラフィーの構成原理である。最初に、造形要素、例えば、文字の文節要素、タイプフェイスのスタイル、入力・出力方法、色調（明度、彩度の程度）、文字サイズ、縦横比、文字の太さ、文字傾き、読む方向、スペース、形態の変形 … 等を変数とする構成の原理が示され、それに基づき、タイポグラフィとグリッドシステムが説明される。この方法は、ホルツェプフェルの商標をモチーフとした、美しい変化の可能性として提示される。

今日の絵画の章で述べられる通り、ゲルストナーにとって「今日性」と「質」は別個の課題であり、彼の探求は「質」に向かっている。形態や色彩の「質」は、直感的に、あるいは跳躍によって一気に達せされるよりは、構成要素の分析とその構成、丹念な組み換えによる可能性の追求の結果として、もたらされるものである。逆説的であるが、短絡的に造形の結果を導くことが主流の時代にあっては、時間はかかるが、精緻な方法による丹念な積み重ねの造形の方がデザインの今日進むべき方向を示すものになる。

ゲルストナーによるその後の著書、「色の形」も彼の上記の関心と方法が反映された良書である。

ゲルストナーの方法は、本書のタイトルでもある「プログラム」、つまり造形の「手順」に収斂しているように見えなくもないが、その手順を考えるために、その時代をリードする科学的知見を取り込んだゲルストナーの知的好奇心を読み取ることができる。

ムサビの教員が選ぶ
美大生におすすめの本
Recommended books for art students.

基礎デザイン学科
小林昭世教授

基礎デザイン学会という学会があり、2015 年に『デザインを考える　名著とともに』という特集を出版しました。以下は、20 世紀のデザインを振り返りながら考えるために、私が紹介を担当した 14 冊の本です。

『デザインとは何か（角川選書）』

川添登 著，角川書店，1971

『デザイン学 : 思索のコンステレーション』

向井周太郎 著，武蔵野美術大学出版局，2009

『日本のデザイン :
美意識がつくる未来（岩波新書 ; 新赤版 1333)』

原研哉 著，岩波書店，2011

『嶋田厚著作集 第 2 巻
（小さなデザイン大きなデザイン）』

嶋田厚 著，新宿書房，2014

『図の体系 : 図的思考とその表現』

出原栄一［ほか］著，日科技連出版社，1986

『造形芸術の基礎 : バウハウスにおける美術教育』

ヨハネス・イッテン 著 , 手塚又四郎 訳,
美術出版社，1970

『図の記号学 : 視覚言語による情報の処理と伝達』

ジャック・ベルタン 著 , 森田喬 訳,
地図情報センター，1982

『点・線・面 : 抽象芸術の基礎』

カンディンスキー 著，西田秀穂 訳,
美術出版社，1959

『インダストリアル・デザインの歴史』

ジョン・ヘスケット 著 , 栄久庵祥二 , GK 研究所 訳,
晶文社，1985

『近代日本の産業デザイン思想』

柏木博 著，晶文社，1979

『人間と空間』

オットー・フリードリッヒ・ボルノウ 著,
大塚恵一［ほか］訳，せりか書房，1978

『身ぶりと言葉（ちくま学芸文庫 ; ル 6-1)』

アンドレ・ルロワ＝グーラン 著,
荒木亨 訳，筑摩書房，2012

『サイバネティックス :
動物と機械における制御と通信 第 2 版』

ノーバート・ウィーナー 著,
池原止戈夫 等訳，岩波書店，1962

『胎児の世界 : 人類の生命記憶（中公新書）』

三木成夫 著，中央公論社，1983